

佐賀新聞二〇二二(平成二四)年七月二七日

「岡田三郎助—まぼろしの名画『裸婦』—特別公開」に寄せて(中)

県立美術館副館長 松本 誠一 寄稿



《裸婦(部分)》油彩、キャンバス、1935年、個人蔵

「すっかり『モデルが来ました』など言わねばならぬ『お手本だよ』と注意をされた」とは、鳥栖市出身の洋画家古沢岩美(1912~2000年)が岡田の言葉として伝えるものである。これは、岡田が教鞭を執っていた東京美術学校(現東京芸大)の教室でも同様であった。岡田にとって、裸婦モデルは画家が自分の意図を一方的に託す人形ではなく、モデルの裸身に反映するさまざまな色合いをそこから学び取る、いわば絵画制作の導きとなるものであった。

「岡田三郎助—まぼろしの名画『裸婦』—特別公開」に寄せて(中)

## 岡田三郎助晩年の『裸婦』モデル



《婦人半身像(下絵)》パステル、紙、62.2×47.5センチ、1936年

過ぎた。その後、中国大陸での戦争体験を経て、タリなどの影響を受け、シュルレアリスムの艶っぽい絵画世界を展開し、戦後日本を代表する画家の一人となった。岡田の最も身近にいて、岡田のアトリエに出入りする各界各流、賢人佳人の絢爛たる世界を間近に見、あこがれの女性たちの芳香に心を悩ますこともあった。

岡田のアトリエには、描いても描かなくてもお手本は毎日やってくるとして居た間に何人か替わっていったが、古沢が岡田邸を出た後にモデルとしてやってきたのが「北村チャちゃん」であった。このチャちゃん、岡田の病床に最後まで付き添っていた人ともいう。

しかし、古沢が語る「チャちゃん」が、岡田の高弟ともいえる中村研一の思い出に出てくる「チャちゃん」と同一人物なのか、実ははたと迷っている。というのも、晩年のモデルとして、唯一名前が知られているのが「北村久子」という人なのだが、この久子が、『美術手帖』(1977号)で自ら語ったところによると、彼女は、1936(昭和11)年制作の『婦人半身像』(東京国立近代美術館蔵)のモデルであり、「岡田先生専属」で岡田が亡くなるまで、厄介になっていたそうである。開催中の展覧会に出品されている『婦人半身像』の下絵のモデルとなった人である。

つまり、このパステルで描かれた下絵のモデルが北村久子なのだが、一方、チャちゃんと言われたモデルは、中村研一によれば岡田の絶筆となる『編物』に描かれた、窓辺で横向きに腰掛ける女性その人でもあった。そこで思っるのは、そもそも北村久子とチャちゃんは同じ人物だったのか。さらに加えて、今回ほぼ70年ぶりに出現した『裸婦』のモデルは、先の窓辺で編み物をしている女性と同じ人物なのだろうか。そこで『裸婦』と『婦人半身像(下絵)』とを見比べると、こちらはどちらも別人物のように思える。果たして、来館いただくと、皆さんはどつ見るのであろうか。



《裸婦》油彩、キャンバス、15.6×9.1センチ、1935年、河村美術館蔵

唐津市内の河村美術館から特別にお借りしたもので、制作年は渦中の『裸婦』と同じ1935(昭和10)年。大きさが0号以下と、掌サイズほどであるが、額縁は岡田好みの赤漆の縁回しが施され、マットには時代裂があしらわれた豪華で深みのある装いとなっている。そして絵のモデルが『裸婦』と同じと思われるのである。実際に比較できるまたないチャンス。お手本は、必ずや鑑賞者にとっては絵の魅力への導き手となるはずである。

▽「岡田三郎助—まぼろしの名画『裸婦』—特別公開」は県立美術館3号展示室で9月2日まで開催。月曜は休館。観覧は無料。